歴史家のみる生態環境の危機
——徳川時代の経験から

斎藤　修

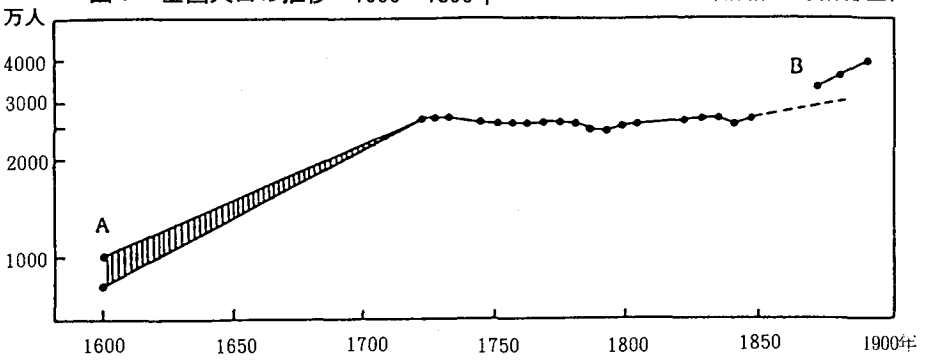
いままでのご報告はいずれも、現代起こっている生態環境の危機、森が少なくなってきているという話がテーマでした。現在進行中の諸問題を聞いた後で歴史の話をするということですと、生態学的に見て、定常状態にある社会のあり様、あるいは仕組みの話をすればいいのかと思われます。これからお話するのは日本の話ですが、例えば徳川時代に関していうと、そこにおける社会と生態環境の関係はどちらかというとそういう定常状態にあったというイメージが一般的かなと思うわけです。しかしながら、徳川時代は文明の程度というか、社会の仕組みというのがかなり複雑な社会で、そういう社会が人類の始源の状態みたいなところと同じような意味での定常状態にあったとはとても考えられません。そこで、そのように見える時代の前にあった社会を見て、そこで何が起こって、それにどのような対応がなされ、その結果どうなったか、つまり、いま私たちが持っているようなイメージになったのはなぜなのかということで話をしてみようと思います。

現在の徳川時代イメージを作っているデータとか資料というのは、ほとんど江戸時代の後半のものです。ですからそれ以前の17世紀を見て、その時代に何が起こっていたかを考えてみたいというのが私の話のポイントになります。その時代はあまりデータがないので、話し手としてはあまり嬉しくはないのですが、少し欲張ってその時代にまで遡ってみたいと思っています。

徳川時代の前半は新田開発の盛んだった時代です。これは高校の教科書などにも書いてある動かすことのできない事実です。私の話は三題噺みたいになっておりまして、開発と人口と生態環境という３つですが、このうち開発についてはほとんど説明する必要のないことかと思います。

２番目の人口ですが、17世紀は片方で新田開発が進行し、もう一方で人口増加があった時代でした。図１が徳川時代の人口の趨勢ですが、最初の年は1600年くらい、豊臣秀吉から徳川幕府ができる頃とお考えいただければいいと思います。それから図の中で、上昇カーヴが頭うちとなったところが1720年頃、吉宗の時代です。そして再び人口増加が始まるあたり、明治維新がちょうどこの辺ということで、きれいに３つの時期に分かれます。徳川時代前半というのは人口増加の時代で、後半というのは定常状態にある。そして、明治維新あたりから、また人口が増えはじめたのでした。

図1　全国人口の推移　1600－1890年　（縦軸：対数目盛）



資料：A．斎藤修『プロト工業化の時代』（日本評論社，1985)、図9－1（A），185ページ、1600年は速水推計による上限と下限、1721－1846年は政府全国人口調査、いずれも武士等の除外人口を含まない。1846－81年の破線は、1846年の政府調査人口が年率0.4％で増加した場合を示す。
B．内閣統計局に推計全国人口：1872，80，90年

太閤検地の頃の人口はこの図にあるよりずっと上で、1800万くらいであったと比較的最近までいわれてきました。しかし、その推定には根拠がないことが明白となり、その結果、17世紀の間に起こった人口増加というのは結構大変なものだという話になってきたわけです。これは年率にして1％を少し下回るぐらいの水準で、現在の開発途上国ですと2～3％は当たり前ですから、現代見られる人口増加と比べれば、ものの数ではないですが、このくらいの人口増加でも1世紀以上続きますと、18世紀初頭のところが3000万くらいですので2倍以上、3倍近くになるという人口増加であったということになります。ちょっと細かいことですが、この系列は平民人口のみで、武士等のいわゆる除外人口が入っていません。武士の場合、定義上自分はカウントしないということなのでしょうか。総人口を見る場合、もうちょっと上乗せしなければいけないですが、傾向を見るにはこれでも問題ありません。明治以降で人口の増加率が一番高かったのは1920年代後半から30年代、そのときに年率で1.5％くらいまでいきます。世紀の変わり目の1900年あたりではまだ1％でした。ですから、明治の間の人口成長にほぼ匹敵する人口増加が相当に長い期間続いたのが、戦国の末から元禄、享保くらいまでの時代ということになります。そうしますと、片方で新田開発があり、もう一方で人口増加があったわけですから、多分自然環境にも何か影響が出たに違いないということになります。これは、いままで歴史をやってる者の間でほとんどやられてこなかったトピックで、そういう観点がなかったといった方が良いと思います。

しかし、ないのは研究だけではありません。エヴィデンスも少ないのです。特に数量データは絶望的に足りない。そういう観点からすると、一番良いのは当時の人達が書き残したもの、特に熊沢蕃山の書物であろうかと思います。ハンドアウトに載せた最初の引用を読みますと、「静なる時運にあたりて、文武の教なければ、国郡の主も人に君たるの道を知らず、栄花のおごりを事とせり。其上に仏者の奢りをきはめ、無道至極して、天下の山林を伐りあらしたれば、

郡国の浅き山は忽ちつき、吉野熊野木曽路土佐等の深山も日本国の材木を出す事なれば、田畑と心得て、材木に仍而露命をつなぐもの幾千万と言う数をしらず」と書いてあります。昔の人は白髪三千丈みたいないい方をするので、こういうのを数量エヴィデンスとみなすのは大変難しいわけですが、17世紀に山が伐られて森林が減っていく有り様が描かれていると思います。蕃山には「十の山のうち八つは禿げ山になってしまった」という記述もあります。本当に80%の森林がなくなったと考えると大変なことでして、そんなことはあり得ないと思いますが、そういう事態が進行していたということがわかります。

その後18世紀に入って、享保の頃ですが、田中丘隅という人の『民間省要』という、徳川時代をやっている歴史家にはよく知られた史料があります。それによると「総じて材木の山々は伐尽る事、頃日の大火の為斗にあらず」。この本が書かれた前の年に江戸で大火がありましたが、そのため材木需要が急増し、山林が少なくなったということではないのだと。そうではなくて「只元禄年中世に衒商の類」、これは紀伊国屋文左衛門のような商人のことをいっているはずです。そういう連中が「金銀を以て橋として、及ぶ限り至らぬ限り隅もなし、山入して伐尽したるより、山々の木悉く尽たり」。こういう一種の建築ブームがあって、そこに上方マネーが暗躍して、紀伊国屋文左衛門などが山に入っていって良木からどんどん切ってしまった結果、こういうことになったんだと述べているわけです。田中丘隅という人はいまの川崎辺りの人で、そういうところにもそういう情報が入っていたのは面白いかと思います。

また、17世紀の後半というのは山を巡る争い、水を巡る争いというのが非常に多かった時代だといわれております。これはイメージを摑む上で良い例かと思うのですが、最近注目を浴びるようになった備後の福山にある草戸千軒という、復元された中世の市場町があります。福山に行くと大変立派な博物館があって、そこに復元されています。川の中州みたいなところにあった港町でしょうか。多分寛文だったと思いますから、元禄よりほんのちょっと前、その時の大水でもって完全に水没してしまって、その後の人々の記憶から消滅してしまった町です。これは、この頃大きな洪水があちこちで起ったということの一つの証拠になるかと思います。幕府の資料等を見ましても、中央政府レベルで対応しなければならなかったような大きな争論、水を巡る争いとか、山を巡る争いとかがいくつもあったということが歴史家の研究でもはっきりしています。

それからもう一つ。塚本学という歴史家の仕事の中に『生類をめぐる政治』という生類憐み令を巡る政治的状況を読み解いた本がありますが，この本の中にはもう一つ鉄砲改めの話もあります。日本は刀狩でもって武器とか鉄砲は全く無くなったといわれてますが、実際調べてみ

ると村々に結構鉄砲があったということがわかります。なぜかというと、この時代、開発が進み、開発前線が奥へ奥へとシフトしてくると山の動物と出会う。そういう動物がせっかく開墾した田畑を荒らす。けしからぬ動物のためには、刀狩の精神からいえばおかしいが、村々に鉄砲を置いてよかろうということで、鉄砲所持が許されている。調べてみるとそういった例が少なからずあるのです。そういう、一見したところは小さな歴史と見える現象の背後には、開発前線のシフトという大きな時代状況があったのです。そしてこれも、この時代が開発の時代、且つ自然破壊の時代だったということの傍証になるかと思うのです。

最後にもう一つ小さなエヴィデンスをあげますと、これは千葉徳爾さんが随分以前に書かれたものですが、樹種の変化の資料があります。ちょうど享保の頃ですが、広島地域の木の種類をあげたものがあり、徳川時代の末、ないしは明治の始めくらいのその地域の記述と比較すると樹種が減っていることがわかります。徳川前期ではカシ、マキ、栗、杉等が挙げられているのが、明治維新前後になると赤松としか書いてない。こういうのを見ますと、多分に印象論ですが、徳川時代の前半の新田開発と人口増加の結果として山が荒れ、森林資源が減っていった様子が想像できます。

17世紀における生態環境の危機ということが事実であるとすると、それに対して徳川時代の人達はどういう対応をしたのだろうか。これが次の問題となります。そういうことを考えることによって、現代から見た場合には徳川時代が安定的な定常状態の社会に見えるようになった経緯が、多少なりともわかるかも知れないと思います。

まず第一にあげられるのは、中央政府の反応です。それは幕府が1666年２月に出した「諸国山川掟」という布達に表れています。近年、新田開発が非常に盛んなため、草木の根まで掘ってしまい、その結果洪水が起こって川底が高くなり、氾濫が起こる。こういうことがあっては困るので川上のほうでは木を植えなさい。川の土手のところにはなるべく竹林を植えなさい、焼畑は止めなさいと、布告したものがこの諸国山川掟です。これを非常に大きく取り上げた歴史家が大石慎三郎さんで、中公新書『江戸時代』で、これは幕府の開発万能主義からの転換であり、その宣言であると書きました。しかし、それに関する塚本さんの考証によると、そんな単純なものではなくて、背後には幕府と諸藩の力関係等とか、いろいろ複雑なことがあって、大石さんの仮説はおそらく正しくない。むしろ「諸国山川掟」が出たということ自体が、その時代に起こっていたことの反映であって、幕府の法令の段階でもそういうことをいわざるを得ないほど山が荒れ、川に洪水が起こるという事態が起こっていたということの証拠なのかも知れません。

対応という意味からいうと、多少なりとも意味のある、実行性のある施策は、むしろ留め木とか留め山という藩のレベルで行われた御用林に対する施策です。これは要するに、枝一本切ると腕一本が飛んで、木一本切ると首が飛んでしまうという話ですが、そういう禁止的な施策が行われ、そのような動きは、保全という観点からすれば一つの効果を持ったに違いないと思うわけです。これが17世紀の末から18世紀の前半にかけて、あちこちの藩で出てきているということが林政史ではいわれています。

もう一つそれとは違う流れも林業史にはあります。それは採取林業から育成林業への転換だということです。それまでは、需要があれば一番手近にある一番良い木から切っていた。ところがその結果、禿げ山になってしまい、木を得るためにはいままでみたいに手近なところではだめで、深山まで入っていかねばならない。そうするとコストが上がり、かつまた質の良いものも得られず、サイズも小さくなるということが起こるわけです。その結果、植林をする林業に転換が図られたのだということです。勿論パッと変わったのではなくて、長い期間かかってなのですが、それが歴史の流れというわけです。

そういうことで、もう一度、熊沢蕃山に戻ってみましょう。「近年山荒川浅くなれり。是国の大荒なり。昔よりかくのごとくなれば、乱世となり、百年も弐百年も戦国にて人多く死し、其上軍兵の扶持米難儀すれば、奢るべき力もなく、材木・薪をとる事格別すくなく、堂寺を作ることもならざる間に山々本のごとくしげり、川々深くなるといへり」。私は人口をやるものですから、これを読んでマルサスの人口論とまさに同じだと思いました。人口が増加していくと、地域の人口の扶養力が不足する。そうしますと、死亡率が上がってきて、どこかで人口の天井にぶつかる。そこから、今度は人口が減り始める。人口低下が底をうつと、再び人口増加の局面に入る。そういうサイクルを描くわけです。これとまったく同様に、戦国になったり、平和な世の中になったりすることによって山々が荒れたり、繁茂したり、サイクルが繰り返される。それがいままでの世の中だったと云うのです。しかし、面白いのは、「乱世をまたず、政にて山茂り川深くなる事」は可能だと蕃山はいうのです。それは何かというと植林です。「草木なきはげ山を林となす事あり」というのです。彼が云う植林というのは、いま我々がイメージするのとだいぶ違いまして、鳥の落しに頼る。つまり鳥の糞に混じりたる木の実はよく生えるものだ。山に近いところに稗みたいなものを植えて、そこに鳥を呼んで、そこで木の実が芽を出せば、また林ができるだろうということをいっています。「三十年許には雑木のしげりとなるものなり」。この雑木というのは我々の知ってる雑木林ではなくて、おそらく照葉樹ではないかと思います。

彼の時代以降に実際に行われたのは、それよりもうちょっと組織的なもので、我々が知ってるような杉林、檜林の植林でした。これがその後の流れになり、かつそれを支える制度的なイノベーションが起こりました。昨日のセッションで話のありました「仕組」がここでできるということです。その一つが割山。これは共有地を分割してしまうわけです。共有地のままにしておくと皆好き勝手にするので、山が荒れてしまう。そこで、これを割ってそれぞれに管理させるということが行われました。それから年季山、部分山、これらは官と民との間の話ですが、年季山というのは官有林を村々に十分に長い期限をつけてリースをする。そうすると切りっぱなしにしないで植林をするというわけです。それから部分山、いってみればシェア・クロッピングです。売捌いた代金の何割は殿様に、何割は下々の方にときちんと契約し、安定した収入が見込めるので、育成林業の方向へ、ゆっくりではあるけれども動いていったというのです。別な言い方をすれば、徳川時代後半の林業史は、17世紀における森林資源乱伐への社会の側の見事な対応であったといえるかもしれません。

以上、簡単な素描でしたが、この徳川時代の経験から、このシンポジウムのテーマに関して、何か話題提供できないだろうかということで、最後に何点かあげてみます。

その第一は、問題の立て方みたいなものですが、17世紀にかなりのテンポで生態環境の破壊というものが起こっていたとすると、なぜそのまま進行して現代の第三世界で起こっているような深刻な話にならなかったのだろうという問題を立ててみることができます。これは、コンラート・トットマンというアメリカで日本史をやってる人が書いた本の問題設定なのです。私自身がなぜこういう環境史的問題に興味を持ったかというと、昔、R・G・ウイルキンソンを読んで翻訳したことがあるからでもありますが、直接的にはこのトットマンの書物に触発されてなのです。つまり、こういう観点からする林業史の読みなおしは、大変面白い問題設定の仕方ではないかと思ったからです。そういう問題を立てたときに、そこから先もう少し具体的に何か新しいことが出てくるかということです。

その一つとして、食糧生産と環境破壊の抑制ということの間にトレードオフの関係はあったのだろうかという問題を考えることができます。先ほどまでの報告では、人口増加というのはあまり重要な位置になかったように思いますが、このくらい長いタイムスパンでの開発と資源との関係を考えていく上では、どうしても人口増加というのが重要なポイントになります。人口が増加すれば、食糧をどこかで調達しなければなりません。そうしますと、耕地を広げるために山を伐っていくということが行われるわけです。その場合、通常の理解ですと、それまで行われてた農業は比較的地味の良いところで行われている。その土地の肥沃度に適合的な人

口扶養力というのがありますが、その最適レベルをこえて人口が増加してくると、もう少しマージナルなところが開拓される。しかしそこは、以前より地味の落ちたところなので、全体としての人口扶養力は低下し、開拓前線はさらに丘を上り、森の面積はさらに減少するということになるかと思います。しかし、そういうことが果たして日本の場合、本当にあったのだろうかというのが、第一の問題です。先に見た熊沢蕃山の引用には、森林を「田畑と心得て、材木に仍露命をつなぐ」という一節がありましたが、こういうのを見ると、人々が困って食糧増産のために山を伐って田畑にしていったのかという印象を受けます。しかし他方で蕃山は、むしろ別の要因のこともいっています。その一つは産業です。製塩業とか製陶業のことです。もう一つは都市化があります。蕃山は近世初めの都市建設事情に、かなりのページ数をさいており、例えば、「町屋在家の間に入込まじりたる寺々幾万と云う数をしらず。其材木の費天下の山林をあらす事又幾万億の数をしらず」。蕃山先生はお寺さんが大変嫌いだったらしくて、寺院を目の仇にするようないい方をするのですが、その背後にあるのはむしろ城下町の建設でした。この時代の城下町はみな建設都市です。先ほどの『民間省要』からの引用との関連で、紀伊国屋文左エ門の名前がでましたが、一時的なブームというよりはかなりの長い期間に渡った建設ブームの時代だったといってよいかと思います。都市化にともなう建築需要がかなり重要だったということを蕃山が指摘している、と読み替えてもいいのではないかと思います。現代の途上国を見ると、人口増加率が格別に高いということもありますが、食糧需要の増加が直接的な形で森林資源の減少に結びついているところがある。サブシステンス・リレイテッドというか、そういう形での生態環境の危機があると思いますが、そういうバランスシートの上からいくと、徳川前期の場合は意外とそうではなかった面があったのではないかと思います。

ここで図2を見ていただきます。トットマンの本の中にある図ですが、新田開発のエコロジーについて伝統的な見方を要約していると思います。1590年代、つまり徳川幕府が成立する直前では、沖積平野があり、村があって里山がありますが、山には開発が及んでいない。ところが1660年代、元禄の頃になると、定住地が山のほうにまで作られ、里山はみな刈られて森林が後退している。新田は下から上へと開発されていった。だから山が荒れるということが起こったのだというのです。これは何となく我々の常識と合うように見えます。しかし、実際の変化は本当にこのようなものだったのか。結論を先にいいますと、徳川時代の前半、ないしは戦国時代から進んでいた開発というのは方向が反対で、川上から川下へと進行したのです。そのプロセスの最後として沖積平野が大々的に開発されたのが17世紀だったと考えなければならないのです。

図 2

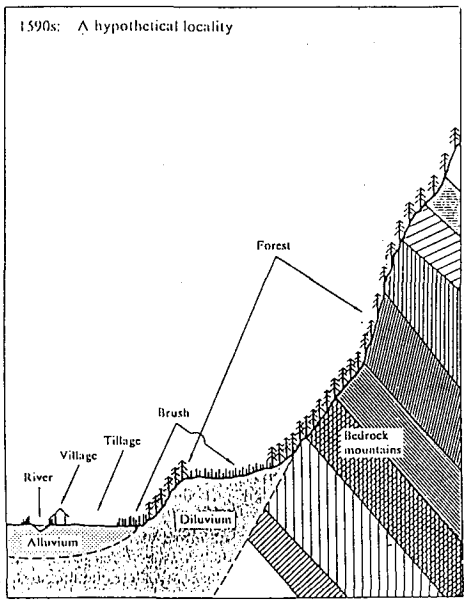


Figure 2. Changes in a Hypothetical Forest Site

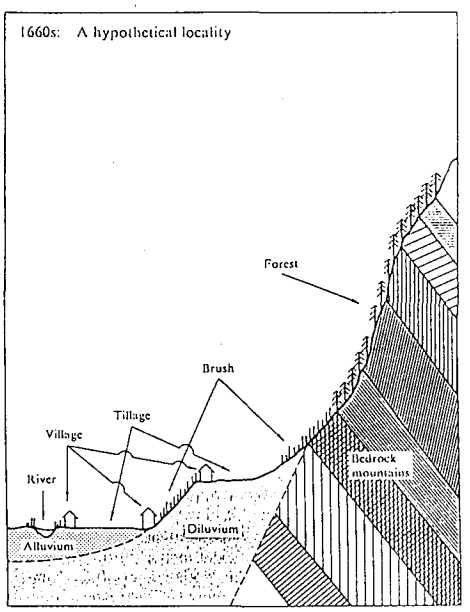


Figure 2. *(continued)*

From Conrad Totman, "The Forests of Tokugawa Japan: A Catastrophe That Was Avoided," *The Transactions of the asiatic Society of Japan*, 3d ser.,vol.(1983):4−5.

それ以前の状態というのはどうかというと、図３がそれを示しています。大変に上手くできた図ですが、こういう小さな谷を単位とする定住地が中世の状態でした。山を背負って、ここに家が２軒あります。現在では本家と分家の関係にある２つの独立した家ですが、おそらく昔はこういうものが一つの大きな屋敷地を作っていたと考えられる。その回りに田畑が開かれ、谷全体が開かれてそれが一つの小宇宙をなす。こういうものが少し大きくなったのが武士団で、それは戦闘集団であったと同時に、一つの開発集団でもあったのです。これは全部段々畑で、あぜこし田というのですが、一枚一枚下へ下へと落としていけば、特別な灌漑用水も要らずに何とか水が足りる。水を得るのが簡単で、かついろんな意味でも住みやすく、防御もしやすいわけです。ところがこの下の方の平坦部、すなわち沖積平野では水をコントロールするのが難しいから、洪水になったり、日照りになったりの繰り返しで、農耕を営むことが安定的にできない。中世はむしろこういうところが基本的な単位であったろうといわれています。これがもうちょっと大きな谷になり、いくつかの谷を支配する武士団が形成され、それらの武士団を集めて戦国大名が成立する。しかし戦国大名自体も一個の武士団として見ると、やはりこういう、

ちょっと大き目の谷がベースになっていました。越前の一乗谷は最近発掘された中世の城下町ですが、あれもまさに谷です。近世への動きは、そういうところから沖積平野におりてくるという変化でした。その意味は何かといいますと、そこでも十全な形で農耕ができるようになれば、沖積平野におりてきたほうが地味がいいので収量が高く、人口扶養力も高い。日本の場合にはマージナルなところへに向かって定住地が伸びていったのではなくて、逆に肥沃なところへ向かって一挙に開発が進行したのです。それがマクロ・レベルでは、我々が普通考えるようには、人口増加と食糧不足とが結びつくことがなく済んだ理由だと思います。17世紀というのはデータが少ない時代でよくわからないことがたくさんありますが、我々のイメージとすると大々的な飢饉とかいうものがそうたくさんあったように思えません。サブシステンス・クライシスというものが果たして頻発していたかというと、中世と比べるならその頻度は減少した時代ではなかったと思います。

大きな問題としての2番目は、経済との関係です。私のように経済史もやってる者は、ここで市場経済の問題を考えてもいいのではないかと思います。サブシステンスの経済ではなくて、

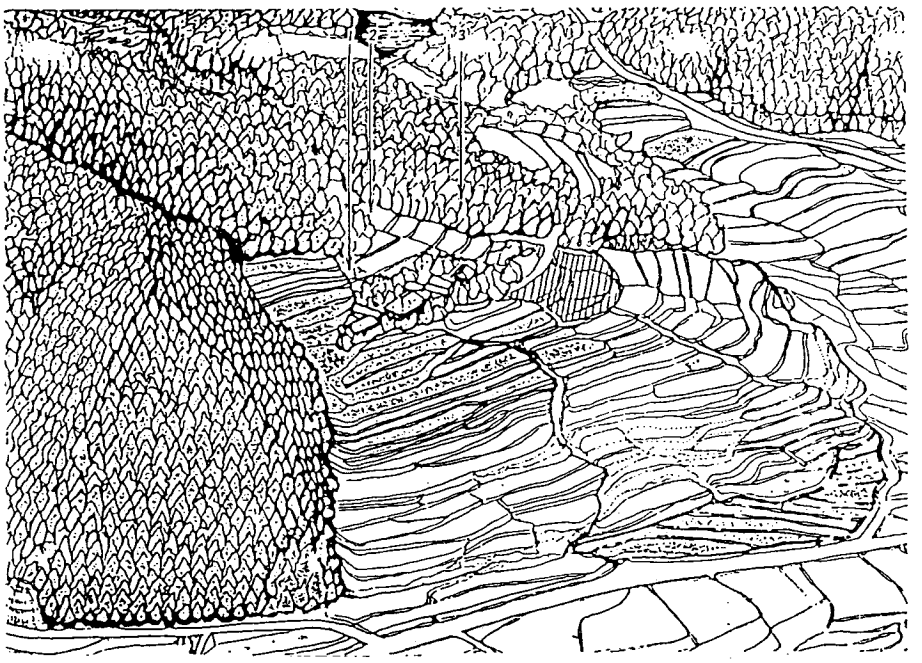


図3　広島県三原市野串
香月洋一郎『景観の中の暮らし　生産領域の民族』（未来社，1983年）、図4。

マーケット経済がここではどう関わってくるのだろうかということです。千葉徳爾さんの『はげ山の研究』によると、マーケットが入ってくると木は根こそぎ取られ、禿げ山ができてしまうという印象を受けます。その本の中で、そういう事例がいくつか報告されているのです。これは現代のアジアやアフリカで進行していることに合うようなイメージであります。しかし、徳川時代の植林の話はちょっと話が違うように思います。なぜかというと、植林は幕府が「諸国山川掟」にあるような命令を出してさせたのではなくて、市場社会へのリスポンスとして植林をし始めたと考えるのが実情に合っていると思うのです。私は今度の報告のために少し当時のものを読み直してみて驚いたのですが、通常農書といわれるものの中に林業のことが書いてあるのです。最初の体系的な農書といわれている宮崎安貞の『農業全書』の中にも、田畑だけではなくて、林業についての項があり、林業は儲かるもの、とあります。「深山幽谷の人遠く尋常の材木など運び出しては運送の労費多くして、益なき所にても、杉檜は、其価三倍五倍も高直にて、造作まけせざるゆへ」、造作まけというのはコストが高すぎるということですから、高値で売れるので其の心配はないということです。「人馬の通ひ成がたき奥山にも、力の及ぶ程種置べし」。宮崎安貞という人は必ずしも市場指向型の農業を奨励したとは思われていないのですが、それにも関わらず、マーケットで必ず売れるのだからきちっと植林しなさいといっているわけです。これは17世紀末、1696年に成稿したものですから、かなり早い時期に、もうすでにこういう認識が出ていたということです。もう一つご紹介したいものに、大蔵永常の『公益国産考』があります。彼は農書ライターの中では一番市場指向的な人です。あちこちで農政のコンサルタントもしていて、江戸時代の中でも一番商品作物の生産を奨励した人として知られています。「百五六十年ほど己前、吉野郡へ薩州屋久の嶋より杉の実を取来たりて、蒔つけ苗を拵へ谷々の山へ植え弘めしに、深谷ゆゑ成木して今は此一郡より板にわきて諸方へ商ひ、又柱やうのものに伐て谷河を流し、吉野川にて筏となし、末は紀州の海辺まで出し、船につみて諸国へ商ふ事幾万両といふ事あげてかぞへがたし」。これは事実についての記述で、吉野は徳川時代でも一番主要な杉の産地になったのですが、それは植林で始まったということをここでいっているわけです。しかし、永常のいっていることはそれだけではない。金が欲しいからといって直ぐ切ってしまうなということを強調していて、年数が経つほど値段は高くなると数字を上げていっています。しばらくの間おくと、うっそうとした木が生えてくる。そして値が高くなった頃切って売ると儲かる。儲かるからまた植林をする。こうしてみると、市場経済を使うことによって森林を守る、育成林業への徐々の転換が市場の成長への反応であったということです。マーケットには、確かに禿げ山にするというような作用もあったでしょうが、

他方では、植林を促すという効果もあった。私達は、その両方を考えるべきではないだろうかと思うのです。

世界で最初に工業化を成し遂げたイギリスは、産業革命の前にすでに禿げ山になってしまったといわれています。それと比べると、日本の場合、こういう植林をするというタイプの反応があったということは非常に重要なことだと思います。それが、明治以降の近代社会から見たときに、徳川時代は生態的に安定的な社会であったとみなされている一つの要因になっていたのかもしれません。

ところで、もう時間がありませんが、他方では薪炭林のことも考えなければなりません。これも二次林として非常に重要なもので、現在でも少なからぬ面積を占めています。これにもおそらく、市場反応型のイノベーションがどこかであったと考えたほうがいいと思います。一例をあげますと、東京の近郊多摩地方は徳川時代はものすごく貧しいところでした。田んぼがない。畑ばかりでした。その畑のうち、土地台帳上は畑になっていますが実は林であったところがあるのです。これは、薪炭を作るための林です。そういう工夫、あるいは経営上の革新というものがあったがゆえに、結果として雑木林が残ったのではないかと思います。

他方では、マーケット志向型対応にも問題点を指摘することができます。二次林は売る目的で作られていますので、生態的多様性がだんだんなくなる。とりわけ、杉、檜の林はモノカルチャー的になるという問題がありました。モノカルチャーだけではありません。それ以外の問題があったような気がします。明治になったとたんに、またあちこちで山が荒れ、川が荒れるということが再現しました。これは木材事情もあったでしょうが、新しい要因として産業需要が登場しました。特に養蚕製糸業というのは貿易絡みで非常に拡大した産業でした。かつ、山付きのところに立地をした産業でしたので、産業用の燃料需要の急増が森林を荒らすことになった可能性は高かったようです。そうしますと、開発なり、人口なりのスピードがちょっと変わると生態系の均衡がまた崩れてしまう。そういう意味では、安定的ということもどこまで頑健であったのか、クエスチョンマークをつけることが必要かも知れません。生態環境の「危機」にしても「安定」にしても、二面性があったように私は思えます。それを認識することが、歴史から学ぶことのできる最も重要なことかもしれません。

コメント

上　田　　信

私は中国史、特に中国社会史において森林の視点から中国の歴史を見直してみようという作業をしております。斎藤さんのお話はほぼ日本に限定されたお話だったので、私の役割はそれをアジアの中の広い文脈の中で位置づけるという作業を進めることであると思います。

今日斎藤さんのお話の中で、以前に聞いたことがあると思い出したのは、鳥の糞の中に混じってきた木の実から森が再生するという熊沢蕃山の話です。これは江戸時代という17世紀の中では非常に先進的な見方ではないかと評価をした人の話を聞いたことがありました。それは室田武さん（一橋大学）という方が江戸システムという形で江戸時代のシステムを物質循環、あるいは経済システムというようなことからいろいろ面白く話されました。耳学問ということで、その話をちょっと紹介いたします。物は上から下へ落ちるのが当然だから山の中に森が生えているのは逆にいうと不自然なのだ。森を維持する養分というのも山の上からどんどん川の流れに従って落ちてしまう。アジアの山がそういう自然のシステムに従ってどんどん養分が落ちて禿げ山になっているのは当然だ。日本では森が山の上にあるのはなぜかというと、鳥が重要だという話でした。山の上にあった養分が雨が降るたびに流れて海に出ます。これは松永さんの話とも関わると思いますが、それが海に出て海の中でもどんどん下の方に溜まっていく。暖流と寒流がぶつかるところで海の底にあった養分、特に燐とかがもう一度海水面の上の方に出てきて、プランクトンが増え、そこに巨大な漁場ができる。その漁場に江戸時代、漁師たちが行ってニシンなどを採ってきて、そのニシンを肥料としてもう一度畑に戻される。その畑に戻ったものを都市の人が食べて糞尿として畑に戻される。そして畑、あるいは果樹というような形で村の中に養分というのが一時ストックされる。それを山から下りてきた鳥たちが食べて腹一杯になったら山の中に戻り糞として山の中に養分を戻していくというような大きな循環があったという話でした。これが江戸システムであり、日本で森がなぜあるかということの説明となるというお話です。数量的な裏付けは全くないので、本当かというところがちょっとありますが、非常に印象的な話だと思います。

この中で江戸時代のシステムが、ある意味で生態環境にやさしいというふうな議論がされてるわけですが、それは必ずしも閉鎖的な経済システムではなくて、例えば北の方で採れたニシンなどを中国地方などで肥料にするというような巨大な日本全体を巡るような経済システムみたいなものがあって、はじめて日本の森の豊かさというものができあがっているという議論に

なるわけです。そういう意味で市場経済というものを折り込んでいても環境に優しいシステムというのもできるんだということの事例として、江戸システムが出てくるということになると思います。

もう一つ江戸時代を考える際に、カナダなどのエコロジカルなムーブメントの中で提起された議論で、バイオリージョナリズムという言葉があります。それは日本語に訳すと生命地域主義となります。ある一つの水系、あるいは一つの盆地というような生態学的にあるまとまりをバイオリージョンと見なし、そこに住んでいる住民がお互いにネットワークを作って、そのネットワークに基づいて行政にその意見を反映させる。そのバイオリージョンという一つの生態学的なまとまりを持った地域が住人側のネットワークの中で一つのユニットを作り上げていこうというような運動で、例えばスローキャンというカナダのロッキー山脈の方にある渓谷でそのような試みが行われているという話があります。そのような話を聞いてみますと、例えば日本の江戸時代の議論として、米山先生だったと思いますが、日本に多くの小盆地宇宙が存在したという議論がなされています。ある意味で日本の中で、小さな盆地がそれぞれの固有の文化圏というようなものを作っている。それがある種の自立性を持ちながら存立し、その基礎の上に江戸時代には一つの藩というようなものが形成されてきたというような議論であるわけです。盆地と藩の領域とが、ある程度の関連性を持って成立している日本の行政システムという見方をすると、日本の幕藩体制はある意味でバイオリージョナリズムで提示されてるような一つのイメージを実現していたものだったかも知れないと解釈できるのではないかと感じられます。例えば熊沢蕃山についても岡山藩という一つの藩の行政に顧問という形で関わる中で、彼の議論というのがが組み立てられていて、藩政と熊沢蕃山の議論が非常に密接に関わることで、その幕藩体制と熊沢蕃山の議論、あるいは幕藩体制と生態的な環境を含み込んだ視野の存在というものが関わってくると思います。以上がだいたい日本についてのことであるわけです。

次に私自身の専門としている中国との比較ですと、中国の場合には18世紀に非常に急速な森林破壊が進みました。この森林破壊を例えば行政システムという点から考えていくと、中国の場合にはバイオリージョンというような形での一つの行政ユニットというものが必ずしも機能を果たしていないのではないかという一つの仮説が提起できると思います。

中国の行政というのは皇帝を頂点とする官僚制によって運営されていました。華南の地域をみていきますとだいたい日本の景観と非常に似て、山が非常に多く川が流れていて数多くの盆地が存在しています。詳しく見ますと中国でいう行政単位である県というものと盆地がほぼ即応関係にあります。その県の長官である知県はだいたい３年程度の任期制で変わっていく、し

かも中国の場合には明代から始まった「廻避の制」という制度があって、その土地出身の人物はその土地の官僚にはしないという原則があります。意図的に地域社会と行政機構のトップというのを断絶させるという制度をとっているわけです。中国のそのような条件のもとで長期的な見通しを持った政策がとれないということが、森林破壊を促進したのではないかと考えられます。ある意味で森林というのは少なくとも100年位のタイムスパンで物を考えないと育成できない、保護できないというものですから、3年単位くらいで次々に地方官が変わっていくという状況では、なかなか長期的な森林に対するような政策がとれないということになるかと思います。

第2番目に日本と中国との比較をしてみた場合、中国の場合には非常に人口流動というのが激しいということがいえます。特に18世紀に入りまして、辺境の山林に対する人口流入が非常に活発になってくる。また一つ辺境でなくても例えば中国の浙江省とか福建省というところでは、いままで人が入っていない日本語でいえば奥山といわれるようなところにも人がどんどん流入して開発していくという状況が見られました。それは日本の藩と違い、県をまたがって人口流動することに全く規制がないということが一つの原因として挙げられるかと思います。

第3に、中国の場合には山林についても上地権と底地権というふうに権利が分離していたために、森林を開発するのは経営権である上地権だけを買ってなるべく早く投資したお金を回収しようという形で非常に収奪的な森林開発を行う。そのために森林がどんどん破壊されてくるというような状況があったということになります。中国と日本の人口増加をみますと、18世紀に大きな違いができ、先ほど日本の場合、斎藤さんの示された最初のグラフで示されているように18世紀に入ってほぼ人口の増加が止まるわけですが、中国の場合は逆にその頃から人口の急増が始まる。それは一つには人口流動というものに対して、中国社会が全く抑制的でなかったのに対し、日本の幕藩体制というものが、ある程度抑制的であったということが関連するのかも知れないと漠然と感じています。

第4番目としまして、アジアにおける近代的国家というものの問題になるかと思います。近代に入ってアジアの中で近代的な国民国家が作られていくわけですが、それは例えば植民地的な分割に起源を持つような国家であり、ある意味で非常に人工的な国民国家だということになるかと思います。その結果、いままでバイオリージョンというものから自発的にできあがってきた社会というものが、例えば国境によって寸断される。例えばメコン川がその典型的な例だと思いますが、一つの河川流域でありながら非常に複雑な国境線に分割されてしまうため、メコン川全体を考えるような行政政策がまったく取れない、いままでは少なくとも取れなかった

という状況だったということになるかと思います。あるいはマレーシアとかインドネシアなどの場合には、バイオリージョンに即応した伝統的な政治的な単位、例えば部族とかに基づくかと思いますが、そういう単位を「国民国家」が否定することによって、初めて近代的な国家になり得るというような状況があった。そのためにその伝統的なバイオ、生態環境と即応したシステムが結果として破壊されていったのかもしれないと感じました。例えば江戸時代から明治時代に移行した際に日本でも森林破壊が再開されたというようなことが指摘されましたが、斎藤さんの指摘なさった産業のスピードということもさることながら、明治政府が幕藩体制というものを否定し、ある種の国民国家を作り上げようとした結果、森林破壊に対して歯止めをかけるシステム、あるいは森林破壊の弊害というものを行政にフィードバックするためのシステムが破壊されたために明治時代において森林破壊が進んだのかもしれないということを漠然と感じました。

以上、非常に大雑把ですが江戸システムということ、バイオリージョナリズムという点、そして中国との比較、そしてアジアの近代と伝統的なバイオリージョナリズム的な行政単位との

質疑応答

原　江戸のインフレ率とか利子率というのは分かりますか。

斎藤　物価のデータを持ってきませんでしたが、人口のグラフからだいたい想像はつくでしょうか。17、18世紀、19世紀の20年代くらいまでは、この人口のカーブと似たような動きをしていたことです。米価だけ見ますとこういう感じですが、利子率はよく分かりません。とくに今問題としている徳川初期・中期に関しては…。

マネーマーケットの話はあまり自信ありませんが、物価のトレンドに関しては非常にはっきり出てきます。ただ、我々みたいなタイプの実証をやるものにとって、材木の価格のデータを調べると面白いと思うんですが、わりと簡単に得られる資料には材木は出てこないんです。マーケットのポイントというのは価格をバロメーターにして動くわけですから、これが分かると木材枯渇にしても供給の安定化にしても、非常に面白い実証研究ができるだろうと思います。

ついでに上田さんのお話に反論したいと思いますが、今日の私の話の中ではこのシンポジウムのタイトルにある地域という言葉がほとんど出てこなかった。どこで地域を考えたらいいだろうかという問題だと思うんです。正直にいいまして答えがないんですが、盆地状の小さな谷というか、そのくらいのところ

で考えられれば、おそらくエコロジカルな面からいうと随分はっきりするだろうと思います。ところが徳川時代の藩という行政単位が果たしてそれにうまく合ってるだろうか。合ってるところもあります。例えば小さなほうでは、諏訪藩などはちょうどいい例だと思います。約五万石なんですが、ほぼ湖を中心に一つの盆地でだいたいエコシステムに合ってる感じの藩です。もうちょっと大きいところで、藩ではないですが、甲斐の国はちょうど真ん中に盆地があって回りを山に囲まれて一国が単位になっている。しかし徳川時代にみられる超勢の、もう一つの側面というのは、それを越えたところで行政の単位ができるようになることです。それをもたらしたのが、下流域の大開墾であると考えることができると思います。そうしますと徳川時代はもうちょっと複雑な行政システムを持った社会であって、そういう幾つかのエコシステムを統合したところに成り立っている政治権力と考えたほうがいいように思います。そういう意味からしても、先程の東北と上方との流通のお話をなさいましたが、それも含めますが、もうちょっと小さい行政単位の中でも、異なったエコシステムを繋ぐ何かが経済の上でもあったと考えたほうがいいのではないかと、考えられます。

もう一つはまったく逆に違う方向からの話です。徳川時代の後半になってなぜ安定したかということが一つのポイントになると思いますが、もっとレベルの下のほうの話に目を向けると、おそらく一番小さな単位として家があると思います。ここの規制力というのは、日本の場合かなり強かったのではないかと思います。先程上田さんは中国の場合非常に流動性が高いと言われましたが、良し悪しは別として、一番小さい社会単位としての家の、コントロールする力が強くなったのではないか、それがどこかでこういう社会の仕組とエコロジカルな問題との関連の話に結びついてるというように私は思っています。